

ついで紹介します。かつて紺屋町内に数軒あった染物屋は、戦後は一軒のみになりました。その町内唯一の染物屋で、十二代目松田広海さんと、十三代目の松田成樹さんが技術を受け継いでいます。

筒書きでつくる製品は、大漁旗、婚礼用の風呂敷、神社のぼり、のれんなどが中心でしたが、最近は、成樹さんの提案で結婚記念日の旗やスポーツクラブの応援旗なども受注しています。大漁旗の注文は、船の名前と旗の寸法だけ伝え、図柄・色彩などはすべて松田さんにお任せというケースが多いそうです。

筒書きに使用する糊は、もち米を粉にしたものとぬかなどを調合し混ぜ合わせた自家製。糊の硬さは、長年の経験と勘で、その日の天候、布地などに合わせ、微妙に調節します。



筒書き

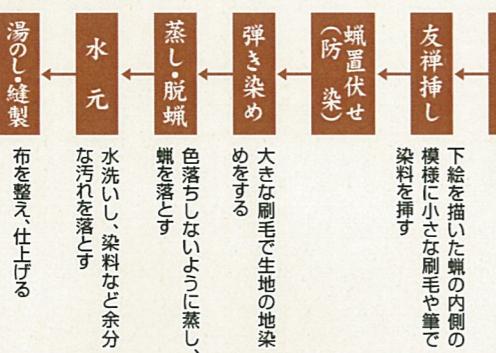
詳しくは…

- とりネット
「とつとりの手仕事」(手仕事全般)
<http://www.pref.tottori.lg.jp/teshigoto>
- 「とつとりの工芸品」(伝統的工芸品)
<http://www.pref.tottori.lg.jp/dd.aspx?menuid=95598>
- パンフレット「鳥取の手仕事」
(鳥取県市場開拓室発行)をご覧ください。

問合せ先 県庁観光政策課
電話 0857-26-7237



美しい椿模様の友禅



蝉縞染めの工程
「手描染 アトリエカワハラ」では、絹や綿の天然繊維の布に蝉縞染め、ぼかし染めなど様々な技法を用いて作品作りをしています。
今日は、技法のひとつ「蝉縞染め」を紹介します。

「蝉縞染め」は多くの場合、二つの工程を専門の職人が分業で仕上げますが、川原さんは、すべての工程を一人でこなしています。

「鳥取で京都や金沢のような昔から大きな生産地と同じように友禅染めを生業とすることは難しいと思います。今までもこれからも、伝統的な技術を用いながらも現代の感覚を取り入れた、自分オリジナルの作品を染めていきたままでしたが、県内では、多くのかたが藍染め、草木染めなどの作品を制作し、活躍しています。

大山友禅染の製品は、着物・帯はもちろん、Tシャツ・ストール・テーブルセンターなど幅広く、絵柄は繊細なものから大胆なものまで、とてもバラエティに富んでいます。

筒書きの技術は、先代の仕事を見て、実際に自分の手を動かして覚えていかなければいけません。「はじめは、先に目が肥え、手が追いつきました。一生これでいいと満足することはないでしようね」と話す職人歴40年の広海さんは、今なお技術の向上を目指しています。



伝統の技と新たな挑戦 鳥取県の染色

伝統的な技術を用い、手作業で糸や布を染めることを生業とする「紺屋」。近年では、ほとんど見かけなくなりました。今回は、そんな中で江戸時代から代々続く老舗と、県外で修行し工房を営む伝統工芸士を紹介します。

見直される 伝統的なデザイン

鳥取県では、古くから麻や絹が、近世になってからは木綿が各地で染められていきました。その名残で、今でも「紺屋町」などの地名があります。江戸時代までの染料は、草木、鉱物など天然のものでしたが、近代になると、化学染料や化学繊維が出現。染色方法も多様化し、作業は機械化されました。衣類は着物から洋服に変わり、伝統的な行事も少なくなっています。風呂敷などもあまり使われなくなり、伝統的な手仕事による染色は産業として成り立たなくなりました。その一方で、大漁旗や風呂敷などの縁起の良い図柄などが若い世代の間で人気があります。



婚礼用の風呂敷

代に注目され、インテリアなどに使われるなど、見直される兆しもあります。古き良きデザインがかえって新鮮に感じられるようです。

筒書きの工程

米子市紺屋町、米子市商店街の二画にある松田染物店は創業から306年、江戸時代から藍染めの紺屋としてスタートし、明治初期より筒書きを始めました。「筒書き」は、渋紙(柿渋を塗った和紙)の筒に、染めを防ぐ糊を入れ、筒の先から糊を絞り出して、布に模様の輪郭を描く伝統的な染色の技法です。



戦前までは藍染めを、戦後は筒書きを主体として伝統を継承し

染色の技法です。

筒書き

染色用の刷毛

筒書きに欠かせない渋紙でできた筒。和紙で出来ているので通気性がよく糊の状態をいい具合に保てるといいます。「糊も息をしていますからね」と松田さん。

筒書きに欠かせない渋紙でできた筒。和紙で出来ているので通気性がよく糊の状態をいい具合に保てるといいます。「糊も息をしていますからね」と松田さん。

筒書きに欠かせない渋紙でできた筒。和紙で出来ているので通気性がよく糊の状態をいい具合に保てるといいます。「糊も息をしていますからね」と松田さん。